
やきそヴァ

伊之口浩作

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

やきそヴァ

【Nコード】

N7122A

【作者名】

伊之口浩作

【あらすじ】

特大焼きそばパンを巡る攻防戦。果たして勝者は？昼休みに巻き起こった、風画シリーズ第四弾！！

やきそヴァ 110円(前書き)

元ネタ提供者：暇神さん

ありがとうございました！(´▽｀)

やきそヴァ

やきそヴァ 一一〇円

とある昼下がりの屋上。そこに一人の青年があぐらをかいていた。筋骨隆々な体付き、浅黒くワイルドな顔立ち。そんな彼、白狼風画は、屋上であぐらをかいていた。彼は、自分の顔とほぼ同じくらいの長さの特大焼きそばパンを抱えている。今日の彼の昼食である。

「ふいー、苦節三ヶ月、やっと巡り会えた。長かったなあ」

焼きそばパンを両手の掌に載せ視線の高さまで掲げると、感慨深げに呟いた。

風画がそう言うのも無理はない。それには幾つか理由があるのだ。風画の通う学校の食堂では、週に一回、月曜日にこの特製特大焼きそばパンが売られるのだが、競争率が凄まじいのだ。軽く見積もっても、その倍率は普通の焼きそばパンの三倍である（新聞部調べ）。それもそのはず、特大と言うものの、値段は通常の焼きそばパンと同額の一一〇円で、サイズ的に見ればかなりの破格である。これに飛びつかないは少なくない。四時間目終了と共に解禁される特大焼きそばパンを目指し、毎週多くの飢えた獣共が群がる。その光景は戦場さながらで、月曜の食堂のカウンターは混乱と怒号の渦に包まれるのだ。

「さて、いよいよご対面だ……」

焼きそばパンを乗せた手を、あぐらをかいた膝の上に乗せ、しみじみと焼きそばパンを見詰める。スリットの入ったロングサイズのコッペパンに収まった焼きそばのソースが、燦々と降り注ぐ太陽光を反射する。その光はビニール越しでさえ彼の鼻に香ばしさを届けているようだった。

今日は一際壮絶であった。その日群れた獣は、およそ五〇名。しかも、その内の一〇名はラグビー部である。遅れて食堂に到着した風画は、その雑踏と混乱の中を人並み外れた腕力と体格を持って強行突破し、やっとの思いで特大焼きそばパンとの対面を果たしたの

だ。

「やっぱり、最後に物をいうのは体力だな」

晴れ渡った青空を仰ぎ、年寄り臭くそう言った。

風画はあまり力任せに事を進めたく無かった。彼の身長は二メートル弱、体重は一〇〇キロ近い。更にバスケットボール部に所属し、ポジションはセンターなので相当ガタイが良い。普段なら周囲に対する遠慮から強攻策は取らなかつた風画だが、今日こそは引くわけには行かなかつた。

「では、白狼風画一七才独身、行かせて頂きます」

風画は焼きそばパンの収まつたビニール袋を開けるべく、袋の両端にある接合面の一方に手を掛けた。

風画を凶行に駆り立てたのは、何もラグビー部の存在だけではない。今日の風画には、焼きそばパン以外の物を買う金銭的な余裕が無かつた。その上、その日はこれまでに無いほどの強烈な空腹に見舞われ、放課後に控える部活動はいつも以上にハードなメニューに設定されている。想像を絶する強烈な飢え、ラグビー部と言う名の障壁、後々控える壮絶な試練。前門の虎、後門の狼、そして更に目の前の熊、とでも言うべきだろうか。それら全ての事象が、彼の理性を崩壊させ、本能を解き放つたのである。

全開になつた風画は止め様が無かつた。ラグビー部の一人の襟首を後ろから掴んで引き倒すと、その物音に周囲が呆気にとられた瞬間、次のラグビー部を放り投げていた。次から次へ学校屈指の大柄達を放り投げる。奥義バックドロップ、荒技ブレーンバスター、大技パイロドライバー。止めと言わんばかりに、十八番のフィッシュアイマンズスープレックスホールドを決め、彼は栄光を勝ち取つたのである。

（今日という日に感謝しよう。アーメン。南無阿弥陀仏。メツカに向かつてお辞儀……。メツカってどっちだ？）

日本人特有の複数宗教の観念を丸出しにしながら、風画は大口を開けた。受け入れ態勢万全。どっからでもかかってこい。某ピン芸

人風に言えば、『バツチ来〜い』である。

『何も、そこまでしなくても良いだろ……』

風画の本能を前に散った多くの男達やギャラリからの冷静な突っ込みも、勝利の美酒に酔いしれる風画の耳には届かずにいた。

『大バカ野郎……。何で好きになっちゃったんだろっ？』

その光景の一部始終を目撃し、ひどく落胆した美奈の姿も、焼きそばパンで埋め尽くされた彼の眼中には入っていなかった。

『大ニュース！ 一斉送信！ 白狼風画、食堂で大暴れ。負傷者多数』

偶然その場に居合わせた新聞部のメール送信も、彼の知る範疇では無かった。

『ここはスラム街かね？ 前に訪れた県内屈指の不良高校でも、こんな事はなかったぞ。私は帰る。視察は終わりだ』

『教育長。ちよつと待って下さい！』

風画の暴走は、たまたま学校を視察していた県の教育長の目にも留まった。これにより予算の大幅カットを受け、更に厳しい処分を受けた校長のはらいせに、風画は後々厳しい処分を受けるのだが、当の本人はそれを知る余地もなかった。

風画の口に焼きそばパンが入ろうとしたその瞬間、彼の背後から聞き慣れた声が聞こえた。

「風画じゃ〜ん。屋上のカギぶつ壊して何してんだ？」

どこか緊張の無い飄々と響く声。風画が振り向くと、そこには見慣れた男が立っていた。

やきそヴァ AV

身長一八〇センチ弱。かなりのイケメン。襟足は長めで、全体的に茶色っぽい頭髪。彼の名は飯島進矢と言い、風画の同級生でバスケット部に所属している。他に彼を言い表すなら、顔の割にはバカで、いい加減な性格の持ち主である。

「聞いたぜ風画よお。何でも食堂で大暴れしたらしいじゃん。ラグビー部の高畠がキレてたぜ。お前一週間以内に死ぬな、うん」

風画の肩に腕を回し、気障りな口調で言い放つ。なんとなく、発言が鬱陶しくて仕方がない。

「ついでに美奈ちゃんもかなりオッチーだったぞ。どうする？」

「うるせえな。てめーの趣味がAV集めだって高木ちゃんにバラすぞ」

「趣味じゃねえよ」

「そつだな。お前は出演する方だったよな」

「殺すぞテメエ！」

風画の一言に憤慨し、声を荒げて怒鳴る進矢。進矢が怒るのには、少し込み入った事情があった。以前、風画が進矢の部屋を訪れた際、彼は進矢の部屋に隠された大量のAVを発見したのだ。その上、ノリでその内の一本を見てみようという事になり、無作為に風画が一本選び出したのだが、その一本がまずかった。それに出演していた男優が、進矢にそっくりだったのだ。しかも後々その男優の名前が『飯島進也』である事が判明し、それからと言うもの、進矢はその事で散々いじくり回されたのである。また、進矢には高木裕美という夏休みに必至になって獲得した彼女がいるのである。男同士では単なる笑い話だが、それが女性に聞かれると冗談では済まされないだろう。下手をすれば絶交されてもおかしくないネタだ。

閑話休題。

そのおり、進矢は風画の手にした特製焼きそばパンに気付いた。

「お、これが噂の焼きそばパンか。相変わらずでかいなあ」
進矢は焼きそばパンに目を落とした。

「風画、これくれ。オレまだ昼飯喰ってないんだ」

「ダメ、絶対ダメ。オレが命懸けで獲得したんだぞ、それこそお前にとつての高木ちゃんの様にな。オレが高木ちゃんよこせ、つつつたらどうする？」

「お前には美奈ちゃんがいるだろ。なあ、くれっ」

「うるさい！ とにかくこれはオレの物だ」

そう言つと素早く立ち上がり、焼きそばパンを持ったまま進矢と距離を置く。

「どうしてもくれないんだな」

「ああ、お前は食堂の売れ残りでも喰ってる」

「イヤだね。もうこうなつたら実行使だ！ よこせコラ」

進矢がそう叫ぶのと走り出すのでは、ほとんど同時だった。そして、相対する風画も全く同じ瞬間に振り向き、全力で駆け出す。

「待て！ それよこせ」

「イヤだね。そんなに欲しかったら追いついて見る」

「おお上等だよ。デカイ図体しやがって、なにげ俊敏に動いてんじやねえ」

風画は右へ左へと巧みに進路を変更し、進矢を引き離す。進矢もそれにすかさず反応し、風画の進路を追って右へ左へと進路を変えていった。

「へっへ。AV男優め、追いつけるなら追いついてみな。ひゃっほう！」

風画は越えたからかにそう叫ぶと、階段に向かって進路を変える。「AV言うな！」

進矢は風画を追って、階段へと吸い込まれた。

壮絶な追いかっこの始まりである。

やきそヴァ 平和だ

昼下がりの非常階段。その男は缶コーヒー片手に読書に勤しんでいた。文庫サイズの本はカバーが掛けられておらず、タイトルが丸見えだった。

『ドストエフスキー カラマーゾフの兄弟』
なんともまあ重厚な内容である。

彼の身長は一八〇代後半。フレームレスの長方形の眼鏡をかけ、頭は丁寧になでつけられた流れるようなオールバック。伶俐な風貌と品格を持つ彼を、一目見ただけで高校生と判断するのは不可能である。しかし、今は学校の制服を着ているせい、辛うじて高校生と判断できた。

「ふむ……」

ひどく大人びた渋い声で、小さく呟いた。彼の名は藤樹槍牙。風画と進矢と同じ学年で、彼もまたバスケット部である。

そのおり、屋上の方から誰かの怒鳴り声が響いた。

「誰だ……」

槍牙は声のした方向を向き、しばらくそのままの姿勢でいる。

「……………」。騒がしいな。まあ、それも良いだろう」

右手の缶コーヒーをくいつと一飲みし、彼は読書に戻った。

進矢の猛追は凄まじかった。いい加減とかAV男優とかと揶揄されている彼だが、なんだかんだ言ってバスケット部の一員である。体力、瞬発力、巧みなフェイクの裏をかく動体視力。全てを総動員して追われるとなると、流石の風画も苦戦せざるを得なかった。

「しつこいぞ」

「黙れ！ 文句言つならそれ寄せせ！」

校舎内を駆けずり回る二人。そんな中、風画は進路を非常階段に向けた。

この学校の非常階段は、校舎の外に併設されており、階段自体は雨晒しになっている。日当たりが良いので、昼休みや放課後に多くの生徒がたむろしている。その人混みを使い、進矢をまく作戦である。

目の前の扉。非常階段と校舎との間にある扉を指す。背後には進矢。両者の距離は五メートル弱。扉が迫る。手を伸ばし、いつでもノブを回せるように指を開いた。扉まであと少し。

「うらあ」

ノブを掴み、それを捻ると、半ば扉に肩からぶつかるような形で強引に開け放った。

視界いっぱい広がる校舎と、済みきった青空が飛込む。そんな景色の中に一人の男が鎮座しているのを知ったのは、それを蹴り飛ばした時だった。

「ぬおっ！」

男の渋い声が聞こえた。聞き慣れた親友の声だった。しかし、今の風画には彼に対して詫びている暇はない。後で謝ればきつと許してくれる。

風画が階段の踊り場まで来たとき、上から金属音が響く。最初は上履きとぶつかる音だったが、続け様に何度か床をバウンドする音に変わる。そして、床を跳ねるごとに、何かの液体が飛び散る音も聞こえた。

風画は確信した。自分が蹴飛ばしてしまった相手を。しかし、見ず知らずの他人よりはいくらか気が楽にだった。彼はこの程度では腹を立てない男だ。

（槍牙、ゴメンな……）

風画が心の中で詫びると、全身に響き渡る低温が自分の名前を呼んだのとは、ほとんど同時だった。

「全く。どうりで騒がしいはずだ」

風画に後頭部を蹴られ、進矢に缶コーヒーの中身をぶちまけられ

た槍画は、蹴られた拍子に落とした本と吹き飛んだ缶コーヒーを回収している最中だった。

「風画らしくて良い。あいつは、ああしている方が似合う」

風の噂から『風画大乱闘』のニュースを聞き付けていた槍画は、小さく呟いて空を仰ぐ。日本晴れの青空の中を、数羽の雀が飛び交う。そして、恐らくはまた彼らが原因であろう喧騒。

今日は平和だ。

やきそヴァ 平和だ（後書き）

どうも、原作を文章にしただけの、他人のふんどし作家伊之口です。なんかね、この小説はね、ずいぶんと吹っ切れたテイストですな。

アクセル全開ブレーキ全壊みたな感じですね。

さてさて、次のお話はちよつとR指定になりそうです。でも、ある程度自粛はしております。女性読者の皆様の反感を買うこと間違いなしです。でも、見捨てないでください> (| |) <

やきそヴァ マンダム(前書き)

え、ちょっと気付いたことがあります。別に、そんなに重々しい事では御座いません。

それは何かと云うとですね。実は、私がこのサイトに来て小説を書くようになってから、早一年の月日が経ったという事です。つまり、今回の更新は一年記念日更新という事なんですね。

厳密に言えば、もっと早い時期かもしれませんが、一応、一年経過の報告をさせて頂きます。

これまで、ありがとうございました。そして、これからも宜しくお願います。

やきそヴァ マンダム

「あー、もう体育うざい」

「バスケット部が何言ってるの……」

「バスケットは別だつて」

そこは、禁断の花園とでも言えば良いだろうか。十数名のうら若き乙女らが何に脅える事も無く、自らのその麗しき肌を晒す一室であつた。

その中でも一際端正で可憐な印象を放つ二人の女生徒、河合美奈と高木裕美もまた、事も無げにその柔肌を露にしていた。

「てゆーか、大磯センセイってマジ厳しいよね。チャイム鳴る前に居ないと欠席扱いだなんて」

担当の体育教師に対する細やかな愚痴を溢しながら、美奈はワイシャツのボタンを解いて行く。

美奈は間違いなく美女であつた。身長、体型ともスーパースーパーモデル並み。容姿端麗の形容が相応しい。目鼻立ちが整っており、肩からの長さの髪は黒く輝いている。彼女は風画、槍牙、進矢と同学年で、女子ではあるがバスケット部である。また、風画の彼女でもある。

「しょうがないよ。大磯センセイって、ウチらの高校に来る前は布野高校だつたんだつて」

彼女の姉から聞き入れた情報を自慢気に披露しながら、裕美は自分の鞆から着替えのティーシャツを取り出す。

裕美もまた、なかなかの女性だつた。身長は平均より高めでルックスも良い。ぱっちりとした瞳は、なんともコケティッシュだ。美奈が隣にいるせいで見劣りしてしまうが、それでも彼女の容姿は際だつて美しい。彼女もまた風画達と同学年で、バスケット部である。また、裕美は進矢の彼女だ。

ちなみに、布野高校とは県内きつての不良高校で、喫煙、飲酒、薬物、窃盗。更には売春、傷害、恐喝、暴行と、不良の総合商社な

のである。この学校に入学した者の半数以上は、近い将来暴力団と関与、卒業生の半数近くは暴力団関係の職に就くらしい。

閑話休題。

部屋中に他愛ない雑談が木霊する中、部屋の外から粗雑で品の無い怒鳴り声が聞こえた。

「邪魔だ！ どけ！」

「デカいくせに早いんだよ！」

その部屋にいた多くの者には、希薄な怒鳴り声だったかもしれない。しかし、声の主とよく見知った彼女達には、言い知れない胸騒ぎがしてならなかった。

「ねえ……。これって……」

廊下の方をじっと見つめる美奈。着替えはいつしか中断し、前をはだけたワイシャツ姿になっている。

「うん……。嫌な予感……」

着替えのティーシャツに袖だけを通したまま、裕美は固まっていた。

その間にも、例の怒鳴り声はその距離を縮め、それと同時に彼女の不安を煽る。

そして、その時は来た。聖域が侵されたのである。

スライド式のドアが轟音と共にあらぬ方向に開いたと思われた矢先、特大焼きそばパンを抱えた男が、室内に突っ込んで来たのだ。た。

「！」

室内にいた全員が息を飲み、その場に凍り付く。

ドアが吹き飛んだのもあるかも知れない。しかし、聖域を侵す者が現れた事が、彼女らの驚きの対象だった。

「何やってんのよー！」

美奈は顔を赤らめてヒステリックに叫びつつ、はだけた胸を隠すべく、両腕を胴体に密着させた。

「うおおおおっ」

多くの叫び声をよそに、侵入者は雄叫びを上げて走り去って行く。侵入者が反対側のドアを蹴破り外に出たとき、室内には異様な静けさが訪れた。皆が皆互いの顔を見合わせ、戸惑いと驚きを隠せずにいる。

「あれって……。風画クン……。だよね……」

裕美が小さく溢した。一方、美奈はうつ向きでしゃがみこみ、指で床をなぞりながらぶつぶつ呟いている。

「大バカ……。あんなヤツを好きになつた自分が嫌い……」

そのおり、今度は第二波が襲つて来た。

「どこ隠れた！ 出てきやがれ！」

最初の侵入者と同じドアから室内に押し入り、意味不明な事を叫びながら、次なる侵入者がやってきた。

「ちよっ……。！ アンタ、場所をわきまえ……」

地が割れる様な叫声。室内の裕美と美奈以外が、一気に声を荒げる。

二人目が自分と親密な関係である事に驚きを隠せず、裕美は声を張り上げるが口籠る。

「あ、裕美……。あ、いや、あの、これは言葉の綾ってやつで……。それで……」

意味不明な釈明をしながら、裕美に歩み寄る。辺りの叫声は相も変わらず轟き続けている。しかし、その時だった。二人目の侵入者は、床に転がっていたスプレー缶を踏みつけた。

「！ なにいつ！」

缶によって足をすくわれ、二人目は裕美の足下に悲劇的なキスをする。しばらくして二人目が顔を上げると、そこは正に禁断の聖域。神秘の魔境。最後の秘境であった。誰も知りうることのない奇跡の情景だった。二人目は『春宵値万金』の意味を知った。

「おおっ……。！ マンダム……」

二人目は床にぶつけたせいかわ、それとも別の理由かは定かではないが、一筋の鼻血を垂らした。その直後、彼の顔面を裕美の足の裏

が踏みつける。

「何がマンドムだつてえ！ 何が！」

裕美はこめかみに血管を浮かべ、更に力強く二人目を踏みつけた。

「ぐぐう……」

「アンタがバカなのは知ってたけど、これじゃ変態じゃないの！

何か言いなさいよ！」

「ああ、もつと……」

「黙りなさい！ このAV男優！」

不幸な事に、二人目の影のあだ名は裕美の耳に届いていた様だった。この時点で既に絶望的だったのだが、これでもう確定である。

裕美の意を決した行動に触発されたのか、室内にいた美奈以外が一気に二人目に殺到する。吹き荒れる怒号、舞い飛ぶヘアブラシとスプレー缶、飛び交う罵声。地べたに這いつくばる二人目に、一切の容赦も酌量もない暴力の嵐。

「この変態！」

「バスケ部の恥！」

「髪染めてんじゃねえ！ 顔だけヤロー！」

十数名の理不尽な折檻。

嗚呼、これが終焉を迎えるのはいつの日か。これぞ正しく『天国から地獄』であろう。二人目は無事なのだろうか。よくよく考えれば、彼は後々英雄と称えられるだろう。

「しゅ……、修羅場だ……」

その場を過ぎ去った一人目は、二人目の安否を気遣い引き返してきたのだが、それはもう手遅れであることに気付いた。特大焼きそばパンを口にくわえ、彼の方を見て合唱。そして黙祷。

（進矢よ。お前はよくやった。君は英雄だ……）

騒がしい女子更衣室の中で、一人美奈だけが鬱に浸っていたのであった。

やきそヴァ マンダム（後書き）

どうも皆さんこんばんは。今回ばかりは週一更新を手堅く守っている伊之口です。

今回は、ちよつとアレな描写でした。このような描写で感じることで、それは己の能力の無さです。巧い人は巧いんだろっとなあ。しかも今回は一年記念日更新。こんな内容で良いのかなあ。

はい。ぼやきはこの辺にいたしまして、これからも頑張っていこうと思います。七月中には完結の予定なので、更新のペースがちよつと縮まるかも知れません。

やきそヴァ 兄い

校舎の最果て。ほこりつぽい一室。そこには重々しいが古くさい
機材と、ひよろい男達。そして、それらを牛耳るやたらと態度ので
かいもやし男がふんぞり返っていた。

もやし共がぎこちない口調でしゃべり出す。

「黙れ教頭！ いい加減にしないと、お前の鼻の穴……。あれ、違
うな。お前の耳の穴から……。また違う……」

「だああああああ！ カットだ、カット！ てめえら全員死ん
でこい！」

もやしの頭領が声を荒げる。感情を露わにした身振り手振りで他
のもやしに食ってかかった。

「うわわわわわん。こんなの僕の理想ぢやなああああああ！」
一人のもやしが急に泣き出し、脱兎の如く部屋を飛び出した。室
内は異様に緊迫したムードに包まれる。

小学校の学級会並みのまとまりの無さである。一人の無能な指揮
官と、何のプライドもない根性無しの部下。困ったことに、また例
によって空中分解である。

そのおり、また別の怒鳴り声が聞こえた。

「しつこいぞ。この、エロ男優。つか、よく生きてたな」

「黙れ！ 最初に突っ込んだのはお前だろ！ 確信犯め！」

二人は罵り合いながら、凄まじい速度で教室の脇を過ぎ去ってい
った。

「君は私をバカにしているのかね！？ 生徒が暴れているのを見過
ごす教師がどこにいる！？」

ひげ面の教育長は、校長に向かってあらん限りの罵声を投げつけ
ていた。

「いや、あの、その、彼は非常に凶暴な……、違う。普通は大人し

くて良い生徒なんです。バスケット部のキャプテンも務めていますし」「ダメだ！ 君の処分は決まったも同然だ」

教育長は、自らチャーターしたタクシーに乗り込もうとするが、校長が彼の腕を引きそれを阻止する。

「そこをなんとか。それに、彼は冬休みの発砲事件に関与……してませんよ。どちらかと言えば被害者だとかなんとかで」

「そんな事は知らん！」

教育長は校長を振り払い、タクシーに乗り込むべく膝をかがめた。その時である。教育長に背後から何かがぶつかる。教育長は吹き飛ばされ、タクシーのシートに投げ出される形で車内に転がり込んだ。

「よこせ！」

「イヤだ！」

方やタクシーのボンネット側。方やタクシーのトランク側。互いの様子を二枚のガラス越しに伺い、体を痙攣させたように動かして、互いを牽制する。

「何事かね！」

教育長が叫んだ。シートに投げ出された身を起こし、車外に躍り出て怒鳴り声を張り上げる。こめかみには青筋を浮かべ、今にも爆発しそうな活火山を理性で必至に押さええている様子だった。

「校長！ 君の学校は何なんだ！ 生徒の暴動を見過ごすばかりか、今度は客人に暴行かね！ それに、何なんだこの二人の凶悪そうな面もちは！」

彼は顔を真っ赤にして校長を怒鳴りつけ、二人を交互に指差す。二人とも飢えた獣の形相で、互いを睨み付けている。校長と言えば彼の剣幕に押され、腰を抜かしてその場にへたり込んでいた。

「おや。君は……」

教育長は、暴れる二人の内の一人が食堂での暴走の主犯であることに気付いた。何より、他に例を見ないほどの、類い希なる図体である。気付かないはずがない。

「君は食堂で暴れてた生徒だねえ。全く、最近の若者はなつてない！何かあればすぐに『殺す』だの『死ぬ』だのと。命をなんだと思つておる！人の痛みをくれ！」

教育長は大きな焼きそばパンを抱えた生徒を叱責する。叱られている本人は、急に現れたひげ面の老人の存在に戸惑つていた。

その時だった。彼の一瞬の隙を突き、トランク側の生徒が動く。バンパーに足をかけ、トランクを両手でぐつと押すと、彼は一気に車体に乗り上がる。そのまま駆け出してリアウィンドウを駆け上がり、車の屋根へ。フロントウィンドウからの思い切りの良い踏み切り。虚空へと舞う。

「よこせえええ！」

雄叫びを上げて突っ込む。

すると、叱られていた方の生徒は超人的な反射神経で身を翻し、教育長とは反対の方向へと駆け出した。

「野郎！」

飛んだ生徒は逃げた生徒の方を見ると、反射的にその反対方向にある物に踏み込む。見事な三角跳びだった。それと同時に、教育長の顔面は飛んだ生徒の上履きの底で埋め尽くされたのであった。

その男はやたらと機嫌が悪かった。

特大焼きそばパンを買おうと珍しく律儀に並んでいた所を、何者かに投げられたからである。それも、普通の投げ技ではない。身を屈せられヘッドロックをかけられたと思えば、自分の右脇に相手の頭が入っていた。直後、右足を掴まれるや否や上下が逆転し、気付いたときには全身を貫くような衝撃が襲つて来たのだった。

これほどの屈辱は無かった。入学以来、長きに渡つて自分に逆らう者は現れなかった。謀反を起こしそうな悪の芽も、忠実な部下の報告により、残さず摘み取っていたのに、だ。だが、そんな体制がたった一日で、それも食堂で、あまつさえほんの一瞬で崩れ去ってしまったからである。

事情が把握出来ないながらも、彼は悪の芽に報復しようとした。だが、彼の受けたダメージは甚だしく、声を出すことさえ出来なくなってしまったのである。

「白狼め……」

崩れ去った政権を愁いているのか、それとも、まだ全身に残る余波のような痛みに打ちひしがれてか、彼は空を仰いで小さくそう言った。

まあ、良い。そろそろ忠実な部下が帰ってくる。

「兄い！」

帰ってきた。

小柄な男が彼の前に現れた。両手には得体の知れない物体を大事そうに抱えている。

「買ってきやした。けど、『四川&韓国風 激辛八バネロカレーパン』しか残ってなかったツス」

男は、手にカレーパンらしき物を持っていた。何故、らしき物かと言うと色が尋常ではないからだ。まるで、赤黒い絵の具の塊とでも言うべきだろうか。辛うじて食べ物であることは解るが、それを除くと完全に劇物扱いだ。ビニール越しのくせに、強烈な臭気が鼻を突くようだった。

「あと、飲みモンです。『ジンジャーとんがらペッパー&ガーリックマスタードリンク わさわさ』ツス」

もはや飲み物とは思えぬ異彩を放つその飲み物らしき物を、男は差し出す。

（全く、あの食堂はロクな物を売らないな）

ふと気付く。男は、両手の掌を上に向けていた。

「兄い。お金。八七〇円」

（ぼったくりだろう）

心の中でそう嘆く。自分から頼んだというのに、何故だか快く代金を渡せなかった。

やきそヴァ 兄い（後書き）

ここでは、何かと過去の作品の要素が組み込まれていました。気になる方は、私の過去のこのシリーズ物を読み返してみてください。

やきそヴァ ダイビング

「ようやく追い詰めたぞ」

進矢は風画を完全に追い詰めた。ここは校舎四階の廊下の最果て。階段も、教室への通路も進矢の背後にある。唯一の脱出手段は、窓だけであった。

「くそ。くそ。ここまで来て追いつかれたか！」

ここまで来る間に食べていけば良いものを、風画は変な所を律儀に守っていたのだった。彼は未練がましく脱出経路を模索している。「観念しろ！ やきそばゲットお！」

進矢は風画に飛びかかった。逃がしはしない、と跳躍の直後にそう悟った。目の前の風画の姿が視界を占める割合が、時間に比例して大きくなっていく。向こう側の表情も、次第に鮮明になっていった。ただひとつ気がかりなのは、風画が窓の外に向けて、跳躍の姿勢をとっていたことだった。この期に及んで、この男は一体。

一方、風画といえば、進矢が飛び掛ったその時も、まだ可能性を信じていた。進矢が飛びかかるより早く、残された可能性に繋がる手綱を握る。体を窓に向け、膝を曲げて全身を沈み込ませる。全身のバネを縮ませ、後は一気に解き放つだけだ。運良く、目の前の窓は開いていた。

風画が進矢から逃げ切れたと信じ切ったその時、進矢が風画に追いついた。腰の辺りを両腕でがちりと捉え、慣性に従って二人は同じ方向へ飛んでゆく。ただ、風画の手に行っていた特大焼きそばパンだけはそうはいかなかった。

「ああ〜！」

二人は同時に絶叫する。

進矢が風画に組み付くほんの数瞬手前、風画は全身に溜め込んでいたエネルギーの一部を解き放っていたのだった。だが、そのエネルギーの一部は風画ではなく、彼の手にしたやきそばパンに作用し

たのであった。綺麗な放物線を描き、それは窓の外へと消えた。

「チクシヨウ。オレのやきそヴァー！」

進矢と共に廊下に倒れていた風画は、素早く身を起こしそう叫んだ。

「ふざけんな。オレの三ヶ月は無駄にはさせねえぞ！」

風画の執念は凄まじく、彼は迷うことなく窓の外へと飛び出した。何の逡巡も躊躇いもない、それはそれは潔いダイビングだった。やきそばパンと同じく、彼も窓の外へと消える。

「風画ア！」

ほとんど投身自殺ともとれる風画の行動を目の当たりにし、進矢は彼を呼び止めるべく叫んだ。しかし、風画はそれを空中で聞くこととなるのである。進矢の叫びは、虚しく昼休みの校舎で木霊した。

やきそヴァ ダイビング（後書き）

今回はダイブについて書いたので大分短くなりました。その為、次の更新は早めにします。土曜日にできればいいなあ、と私は考えております。

では読者の皆様、土曜日にまたお会いしましょう。

やきそヴァ 劇物指定

「兄い。なんか騒がしいよ」

風画と進矢が追いかけてつこをしている、ちょうどその時の事である。校舎裏のイチヨウの木の下で、二人の男子生徒がまどろんでいた。片方は小柄で人懐っこそうな顔つきの男。もう片方は、贅肉ででっぷりとした体系で、首と肩との境界線がはっきりしない。髪は無く、いわゆるスキンヘッドであり、遠目からは制服を着たダルマに見えなくもなかった。

「うるさい。そんなことより、もっと別の買って来い」

「それ無理だよ。もう売り切れとる」

「この……」

小柄な男は、どこの方言とも取れない奇妙な口調だった。彼の名は石原一輝といい、この学校の二年生である。金髪をオールバックにしており、なんとも田舎のヤンキー臭くてしょうがない。槍牙のとは違い、まるで品が無かった。入学当初からスキンヘッドの事を『兄い』と呼んで慕い、彼の忠実な部下として今に至る。

一方スキンヘッドの方は、名を真鶴勝三という。全身に脂肪がまとわりつき、顔に至っては常にあぶらぎっている。傍目からは、縦の長さよりも横幅の方がいくぶん長いと見えなくもない。肉まんと言っても、強ち間違いではなからう。ちなみに二人の間には、先程一輝の買ってきた劇物指定の物体が手つかずのまま置かれていた。そのおり、彼らのいる所の頭上 校舎の四階辺りから二人の男の叫び声が聞こえた。

「んん？」

勝三は木により掛かったまま上を向き、声のした方向を何気なく眺める。と、その時、彼の視界は茶色く細長い物で埋め尽くされた。

「わあ。兄い」

一輝が勝三の状況に驚き叫んだ。

あろう事か。風画の手から放たれたやきそばパンは、勝三の顔面に着陸したのだ。

「うおおおおおお！」

直後、凄まじい怒号が響く。地上四階の校舎の窓から、次なる落下物である。落下というよりは、校舎の外壁を地面に向かって疾駆しているようであった。二階の壁に差し掛かった辺りで強く壁を蹴り、イチヨウの木に突っ込む。枝を乱雑にへし折り、いくつもの葉を撒き散らしてそれは止まった。

木の根本には、大量の枝葉の残骸と、やきそばパンを顔でキャッチした勝三。そして、その場の光景に啞然とする一輝だけがいた。

「おい。ちょっとそこだけ」

頭上の木の中から声がした。どうやら、ぼんやりと立ち尽くす一輝に向かつてのものだろう。

「あ、あい」

一輝は得体の知れない声に戸惑いながらも、素直にそれに応じた。「よっと」

一番太い枝にぶら下がり、地面に対し直立の姿勢を取ってから、それは地面に降り立つ。校舎の四階からダイブし、イチヨウの木から舞い降りたのは、他でもない白狼風画であった。

「オレのやきそヴァ！」

地面に降り立つや否や、彼は辺りを見回して標的を探る。その眼光たるや、正しく飢えた狼そのものだった。

「おつ。あつたあつた」

風画は獲物を見つけた。それは勝三の顔に、やきそばの面を密着させる形で鎮座していた。

「ふひー。危うく全てがムダになるとこだった。終了直前にスリ―で逆転された気分だ」

バスケット経験があるものにしか解らないようなネタをばやきつつ、勝三の顔の上に乗っているやきそばパンを回収する。

「よしよし。やっと出会えた。感動の再会だ。ちょっとあぶらっぽ

さが増してる気がするけど、まあ良いか」

回収したやきそばパンをじっと眺めてから、彼はそうぼやく。全身脂肪、といっても間違いいはない勝三の顔面に触れたやきそばパンは、普通（この場合、普通と呼ぶことは相応しくない）のやきそばパンよりも多少あぶらぎっているように見えた。

「さてさて、それでは憎きAV野郎も消えた事だし、木陰でゆっくりと……」

風画はそう言っつて、大口を開けてやきそばパンを受け入れる。口に入れた時、覚悟はしていたがあぶらっぽかった。しかし、気にすることなく食べ進める。進矢との攻防もあつてか、みるみる内に半分は彼の胃袋へと消える。

そのおり、勝三が動いた。遠くから見れば、観光地のオブジェが動いたように見えたかも知れない。

「おい、白狼！」

「！」

勝三に名を呼ばれ、風画は勝三と向き合った。しかし、食べるのは止めない。

「貴様、オレ様を投げ飛ばしておきながら、しまいには顔面にやきそばか？ これは気の利いた皮肉か？ あ？」

「……。むもむも」

ポケットに手を入れ、首を大袈裟に反らし、風画の顔を下から覗き込む形で睨みを利かせる。風画の身長が常人離れしている事が最大の原因だったが、気にはしていない。

「何故気の利いた皮肉かというとな、オレ様もその特大やきそばパンが欲しかったからだ。しかも、珍しく律儀に並んでいたのに、だ。あのまま行けば、今頃それはオレ様の物だ」

「……。もんもん」

風画のやきそばパンを指差し、皮肉たっぷり言い放つ。その間にも風画はやきそばパンを食べ続け、咀嚼しながらこくこくとうなずいていた。

「喰うのを止める！」

「……。ぐむい。ふう、旨かった。メシ終了。ごっそさん」

最後の一切れを押し込み、咀嚼して飲み込む。そして体の正面で左右の掌を合わせて、そう言い放つ。食事を終えた風画は、そのままその場を立ち去ろうとした。しかし、勝三は何とも腑に落ちず、彼を呼び止める。

「おいしい。ちよっと待てえ！」

「何だよ」

「お前、オレ様の話を聞いていたか？」

「いや、全然」

「このう……」

こめかみに青筋を浮かべ、怒りで強く握った拳をわなわなと振るわせる。勝三の目には、復讐の炎で燃えていた。あたらさまな皮肉も、その表れだろう。餌を与えられず、生産業者にブーブと不平を漏らす豚のようであった。

「じゃ、オレは帰るわ。次、大磯ちよんの授業だからさ」

『大磯ちよん』とは、大磯教諭のあだ名である。以前、風画達の間で話題となり、なんやかんやでこの名がついた。誤植ではない。

「ほほう。ならば、それなりに復讐のしがいがあるな」

じわじわと怒りに満ちた口調が、その濃度を増す。それは、誰の目にも明らかだった。

「もう一度勉強すること？」

風画はその場の空気を和ませるためか、それともただ単に馬鹿にしているともとれる返答をする。

「それは復習」

一輝が横やりを入れた。

「貴様、ヤルか……」

「上等だ。食後の運動に丁度いい……」

風画と勝三は、互いに闘志と復習の火花を散らす。

そのおり、風画が動く。

「その前によ。その金髪、何か飲み物くれ。喉が渴いた」

そう言っで一輝を指差す。いきなりの指名に当惑し、彼はその場でうろろした。しばらくうろたえてから、一輝は風画に手近にあったドリンクを手渡す。

「はいッス」

「ん、サンキュー。いやね、昼休み中走り回ってるとどうもね、喉が……」

そう言っで、風画は劇物指定ドリンクの容器を逆さにし、天を仰いで口を開けた。容器の中身は直ぐさま重力に従い、彼の校内へと吸い込まれた。

「ぐっ!!!」

風画は顔をしかめる。口の中に広がる凄まじい辛みと刺激。焼けた針で刺されたかの様だった。顔がみるみる赤くなり、苦痛に悶える。

(ナイス)

(当然の事さね、兄い)

身悶えする風画をよそに、勝三と一輝はひそひそと耳打ちする。

「チツキシヨオ〜。げふっ……。舐めたマネ……。げはっ……。ひーひー……」

未知なる刺激に咳き込みつつ、風画は二人を睨み付ける。大口を開け、大袈裟な呼吸で口内を冷まそうとしている姿からみて、相当な辛さだったのであろう。そんな中、一輝はまたもやパシリ根性を働かせる。

「これも食べえい」

そう言っで、風画の口に、例の赤黒い絵の具の塊を投げ込んだ。冷却目的で口を全開にしていた風画には、それを受け流す余裕など無く、半分ほど彼の口内に収まる。

次の瞬間。

「ぐはあっ!!!」

血の塊を吐くように劇物カレーパンを吐き出して、風画はエビ反

りになって倒れる。白目をひん剥き倒れる様は、ホラー映画の死体さながらであった。

「フフ。これで欠課は免れられなくなったな、白狼」

びくびくと痙攣する風画を見下し、勝三はねめるように言った。

「兄い、どうする?」

「屋上に持つてけ。お楽しみはそれからだ」

「わかつち」

二人が陰湿な笑みを浮かべているおり、校舎裏に新たな客が現れる。

「風画あ! 死んでる! どうしよ、死んでるう!」

校舎の四階から駆けつけた進矢であった。ダイビングは直接の死因では無いが、一連の流れを知らない彼は右往左往して慌てふためく。

「おい、お前ら。ぼけーつとしてないで手伝え!」

風画を運び出そうとするが、慌てていることと風画の体格もあつてかうまく行かない。そんな状況を打開すべく、進矢は勝三と一輝を促した。

「おい、石原」

「へい」

「アイツもやつちまえ」

「わかつち、兄い」

勝三に指示され、一輝は即座に動いた。風画の食べかけの劇物カレーパンをつまみ上げると、忍び足で進矢に近付く。

「あんちゃん、あんちゃん」

「ん!?!」

「これあげる」

一輝は素早い動作で、進矢の口に劇物カレーパンを突っ込んだ。

「つぷ!」

進矢の口内に収まるや否や、数千の針で刺されるかの如き痛みが襲う。進矢はその超絶たる刺激に驚き、じたばたともがき暴れる。

「うまく行ったよお」

一輝は声高らかに言った。その声の直後、進矢もまたばたりとその場に倒れる。

「よくやった」

死体の如き二人と、それを作り上げた二人。被害者と加害者が同居する校舎裏に、昼休み終了を告げる鐘が鳴り響いた。

やきそヴァ 劇物指定(後書き)

はい、次回完結です 短っ

やきそヴァ

やきそヴァ 居ました

「んでよ、風画。何でオレはこんな状況で、こんな所にいるんだ？」
「さあね。後ろの肉たるまと、品の無いオールバックに訊いてくれ」
進矢と風画は、両足首と両手首をガムテープで縛られ、床にうつぶせになった状態だった。劇物を口に放り込まれて気絶し、それから目覚ると二人は屋上にいた。そこは、風画が特大やきそばパンを食べようとした所でもある。すっきりとした晴天の下、びゅうびゅうと強風が吹きすさぶ。気温は高めのこの日だったが、体感温度はそれより大分低かった。

「おい、肉。どういう事だ。説明しろ！」

自分の正面にいる勝三に問いただす。すると、勝三は難儀そうにしゃがみ込み、進矢を見下す形で言う。

「お前があまりにもうるさくて、めざわりだからだ」

そう言い、進矢の額を指先でぐりぐりといじくり回す。

「だってさ。それよりもさ、今の状況、結構楽しんでないかい？」

風画が進矢を見て言う。

「なんで？」

「だってお前、ドMじゃん」

「ドMじゃねえよ！」

半ば根拠の無い風画の物言いに、進矢を声を荒げてそれを否定した。しかし、風画は一切取り乱すことなく、自説の根拠を饒舌に語り始める。

「だってさ、女子更衣室で高木ちゃんに踏まれてる時さ、『ああ、もっと』って言ってたじゃん。この変態。バスケット部の恥。髪染めてんじゃねえ」

女子更衣室で進矢に向けて放たれた罵声の口調をまねて、風画は進矢を茶化す。

「黙れよ。つか、最初に入ったのお前だろ！？ 何で、お前は何も

「言われないんだよ!？」

進矢は自分の理不尽な境遇を納得できず、風画を糾弾する。

「それはオレの人望だろ？ 当然じゃん」

「人望？ ふざけんな！ 食堂で暴れまくったお前に、んなもんあったまるか！」

風画の自己評価に言い知れない憤りを感じ、進矢はじたばたと暴れながら怒鳴り散らす。自分と風画とのあらゆる差に対し納得が行かず、不自由な体をフルに用いて怒りを表す。その姿は正に、水を求めてもがく人サイズの巨大魚の様である。

そのおり、地面に突っ伏した二人の小競り合いを眺めていた勝三が口を開いた。それに伴い、彼の頬と顎、顎と一体化している首の贅肉がぶるぶると震え、なんとも滑稽な感じがした。

「おい、お前等。自分の状況解ってるのか？」

「うん、俺はいもむし。こいつはドM男優」

風画は勝三の問いに即答し、いもむしよろしくもぞもぞと這って見せる。それが一段落すると、今度は進矢を顎で差した。直後、進矢が更に怒った。彼の膝の関節はまだ生きていたので、そこを利用して風画に膝蹴りを入れる。

「痛えなお前。おい、ぱしり君、このドM男優をもつときつく縛ってやれ。そしたら気持ちよくなって大人しくなる」

自分と進矢の状況は全く同じだというのに、この期に及んで進矢を茶化すのを止めない。そんな風画の姿勢を見ていた勝三は耐え難いものを感じ、声帯の限界を超えそうな程の大声で怒鳴った。

「黙れ、白狼！ オレ様がお前等にこんな事をしているそもその原因はだなあ！ お前にあるんだ！」

そう言っつて、ずびつと風画を指差した。

「えっ、オレ？」

当惑を隠せず、気の抜けた表情で勝三を見上げる。

「なあ、進矢。オレあの肉たるまになにかしたっけ？」

「……。お前、自覚無いか？」

勝三の咆哮に驚き、しばしひるんでいた進矢は、風画を見てそう言った。風画は相変わらずぱかーんとしている。

「だってさ、そんなにやきそばパンが欲しいんならさ、オレが高々とやきそばパンを掲げてる時に奪い取れば良いじゃん。オレはさ、勝手に投げ飛ばしたりして非人道的な行いをしたんだからさ、それに対して向こうも非人道的な行いをしてもおあいこだと思うよ。変なヒューマニズムとか、ハンパな非暴力的な行動しか取らなかったくせに、オレの事を批判するのは間違ってると思う」

滾々と溢れ出る湧水の如く淀みない口調で、持論を展開する。それは強ち間違いではなく、何より返答に窮する勝三が、その正否の裏付けであった。

「ほらな、何も言えない」

それ見たことか、と言わんばかりに勝三を見上げると、不敵な笑みを浮かべる。

勝三は風画の度重なる言動に更なる憤りを感じる。それをどうしても飲み込む事ができず、勝三は何とも幼稚な行動を示した。即ち、怒鳴った。

「ええい、黙れ！ おい、早くこいつらを落つことすぞ！」

一度天を仰いでから、彼は風画と進矢を交互に指差して一輝にそう命ずる。どうやら勝三は、この二人を屋上から突き落とす魂胆らしい。

一輝は直ぐさまその指示に従い、大きくうなずいてから進矢の体を引きずる。その際、進矢は悲鳴にもよく似たうめき声を上げた。

「落つことす！ おい、止めてくれ！ オレは無関係だ！」

無慈悲な私刑の内容に驚き、引きずられながらも必死の抵抗をする。その姿は、だだをこねる小学生のようだった。

「落とすだと。おい、肉。それはマジで言ってるのか？ たかがやきそばパンで人を殺すのか？」

たかがやきそばパンで人を投げ飛ばし、女子更衣室に突っ込み、校舎の四階から飛び降りた奴が何を言う。

理不尽な私刑には、流石の風画も驚いた。目を見開き、立会人の勝三と執行人の一輝を交互に見回す。

「本当に落としてはしない。バンジージャンプだ。ただ、同意書は無いがな」

視線のみで風画を睨み、低級映画の悪役じみた台詞を吐く。その時の表情といえは、大好物を目の前にした子供と、下劣な感性でのみ動いている独裁者の顔が、複雑に入り交じっていた。

「おい、ロープも探してこい」

「わかち、兄い。ちよつと待つとくんはれのお」

一輝は進矢を引きずる最中、勝三の方を向きそう答える。じたばたともがく進矢をなんとかてすりの向こう側へと搬送すると、今度はロープを探すべくその場を去った。

「さて、今度はお前だ」

そう言つて、勝三は風画の体を持ち上げて肩に乗せると、ずんずんとてすりに向かつて歩き出した。その足取りは、処刑台へ罪人を連行するかのように見えた。

「ふざけんな、脂肪袋！ 一日に二度も校舎から落ちてたまるか！」

風画は勝三の肩でじたばたともがいたが、私刑執行を目前に控えた勝三には無意味であった。その間にも、彼は一步一步処刑台へと近付き、とうとう風画をてすりの向こう側へと連れ出した。

直後、一輝がやってくる。

「兄い、ビニールひもしかなかった」

彼の手には、市販されている梱包用の白い一束のビニールひもが握られていた。

「おい、あんなのでバンジーさせる気か！ せめて虎ロープにしてくれ！」

「おい、ハゲブタ！ てめえ、トンカツにして喰うぞ！ おい、マジで止める！」

二人がそう懇願するも、勝三と一輝はそれを無視して準備にかかった。

「白狼。白狼はどこだ」

私刑 屋上ビニールひもバンジーが執行されようとしている正にその時、その学校のプールでは担当の教師が出席を取っていた。身長は一七〇前後。小柄だが四肢についた筋肉はたくましく、やせた類は格闘家特有の印象を漂わせていた。

「白狼め。事故に見せかけて水死させてやる」

生徒であろう水着姿のラグビー部の大男が、殺意に目を爛々とさせて佇んでいる。

「藤樹。白狼はどこだ？」

担当教師がそう訊ねる。彼は一瞬、回答に窮した。風画が何処に行ったかは、どっちかと言えば彼の関心事だろう。教師の鋭い視線が向けられ、真実を要求する。

数秒の思考、状況判断、分析。答えが出なかった。彼は更に回答に窮する。

そんな時である。プールで整列している生徒達と直面する形でそびえる校舎の屋上から、何かが落ちた。直後、二つの絶叫。絶叫は虚しく校舎の外壁に反響し、木霊となって響き渡る。

「居ました」

藤樹槍牙は風画と進矢を指差し、担当教師に向かってそう言った。「スクラムの練習と称して、あやつを圧死させるのも良いなあ」大柄のラグーマンはそう呟く。

「だっはっはっは！ どうだ、屋上から落ちる気分は」

勝三は眼下で上下する風画達を嘲笑しながら、そう訊く。

「兄い、これおもしろい。も一回やる」

「そうだな。しばらく楽しむか」

そう言って勝三と一輝はビニールひもをたぐり寄せせる。しばらくして、再び屋上にやってきた二人に気はなく、青ざめた顔でぐったりとしていた。

「どつだ。もう一回やりたいか？」

勝三が訊く。進矢は何も言わない。一方、風画は血気盛んに怒鳴り散らす。

「ふざけんじゃねえぞ、肉野郎！あとでリアルにこっから落としてやるからな！」

逆さ吊りにされた事もあってか、真つ赤になって激高していた。

「よしよし。さあ、行って来い」

風画の脅迫をもるともせず、勝三は再び二人を屋上から落としてみた。みるみる二人は小さくなり、地面すれすれの所で一旦静止。直後、伸びきったビニールひもの伸縮性により、再び空間を駆け上がる。その上下動に合わせて、風画の罵声が小さくなり大きくなり、まるで通りすぎる救急車の様だった。

「ひゃひゃひゃ。これは本当に良い。もう一回だ」

笑いによつて、顔中の贅肉がぶるぶると震えた。勝三は二人を引き上げるべく、またもひもをたぐる。

その時だった。

「兄い。てすりがみしみし言うてるよ」

「あ？」

勝三が身をもたれていた手すりが、彼の体重に耐えかねて悲鳴を上げていたのだ。しかし、一輝がそれを喚起した時は既に手遅れだった。アルミ製の手すりは金属のひしゃげる異様な音を立て、横五メートルに渡つて崩れ落ちたのだ。

「うわああああ！」

体重をてすりに預けていた勝三の体は、てすりと運命を共にして落下する。その真下には、ひもで両足をくくられて逆さ吊りの風画がいた。

「ブタアア！てめえふざけんアア！」

直後、空中で熱い抱擁。半ば、風画の上に勝三がのしかかる形であった。風画の全身に、勝三の全体重と落下の際に増幅した運動エネルギーが直撃する。

そして、それはまた新たな災害を生んだ。風画も勝三も、体重は一〇〇キロ近い。計二〇〇キロの荷重と勝三の持つ運動エネルギー。ビニールひもはそれに耐えることが出来ず、呆気なく千切れた。

共に地面に向かって真つ逆さまに落下する。

正に悲劇。風画を下とする形で、二人は地面に激突した。

「ぐ……………あの……………、ブタ……………」

上にのしかかる勝三を押し分け、地面を這いずり回ってそう呟く。恨みや怒りの詰まった呟きだったが、蚊の鳴くような細かいものだった。

「……………お母さん、親父、兄貴、競賀。槍牙、美奈、進矢、高木ちゃん、沙輝……………」

走馬燈の様に、これまでの記憶と、それに関わる人の姿が、彼の脳裏を過ぎる。ぱつと現れては消え、またすぐに違う思い出が浮かんでは過ぎ去って行く。

(やきそヴァパンって、怖え……………)

意識を失う直前、彼の頭の中にはそんな教訓が授けられたのであった。

やきそヴァ 居ました(後書き)

はい、「やきそヴァ」無事完結です。これまで応援してくださった皆様、大変ありがとうございました。

さてさて、気が付けばもう一年、そしてこのシリーズも、もう四段を数えるまでになりました。それには、これまで数多くの読者様のお力添えあつての事と痛感しております。

早くも四段を迎え、無事にそれも終わらすことが出来ました訳ですが、ここで私はちよつとしたサプライズ企画を準備しております。それは「風画シリーズ」に登場したキャラクターの人気投票です。感想に好きなキャラクターを明記の上、どしどしお寄せ下さい。

【投票例】

- 一位 キャラA(必須)
- 二位 キャラB(任意)
- 三位 キャラC(任意)

よろしければ、好きな理由などもお聞かせ下さい。任意で構いません。

【計算方式】

- 一位 3ポイント
- 二位 2ポイント
- 三位 1ポイント

【発表】

交流サイト内、「みんなの掲示板」にて発表します。

【締め切り】

八月二十日までとします。

多くの投票、お待ちしております。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7122a/>

やきそヴァ

2009年5月9日07時00分発行